只見短歌会　五月詠草

大塚栄一　指導

傷痛み深夜目ざめし我が耳に救急車の音真下に聞こゆ　馬場　八智

亡き友の生前言ひし励ましの言葉時折浮かびてくるも　関谷登美子

朝より植ゑ替へ続きわが両手ゴム手袋にふやけて白し　新国由紀子

曾孫より覚へたてなる手紙きて文字も爺じも共に笑ふも　目黒　富子

ボーナスも定年もなき農に生き卒寿近きも野菜を作る　渡部ゆき子

幾千の種を結ぶか畑の草夏の盛りに勢ひやまず　小倉キミ子

曇り空に入所の方と花植えて外に出る楽しみまた一つ増す　飯島小百合

ガラス窓に移る姿に鶺鴒は威嚇しながら何度もつつく　渡部ヨリ子

石楠花の極まり咲ける裏庭に夕べ静かに五月雨の降る　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　六月例会

目黒十一　指導

野のやぶに野焼の煙こもり行く　都

春の蚊や手首の上を放れ行く　一穂

青大将見ぬ間に脱ぎし皮傍に

群生が傘を踊らす花昌蒲　修一

ポコポコと田に入り来たる初夏の水　味代子

草茂るボール沈めば子らの声　弘子

夕暮れて喉の欲するビールかな

雨音へゆっくりと飲む新茶かな　吉児

御下りをねだりて今朝も雀の子

若楓孫の記念樹背丈越す　恒夫

百寿得て医門叩かず夏を越す

粧ひて遙かに会津富士高嶺　幸生

ダム風の揺らすえぞにう芭蕉の碑

万緑の湖底に深き露天の湯　礼

岩肌を殊更白く夏の雲

春耕や訪れ早き獣跡　信

行く春や民家に琵琶と云う音色

夏の月仕舞忘れし軒の笠

風を切る二の腕まぶし衣更

若き日や君のハミング若葉の頃